

世界競歩チーム選手権 帯同報告

加藤 穰

公益財団法人日本陸上競技連盟医事委員会委員

1. 世界競歩チーム選手権について

1961年より隔年で開催されている競歩の大会で、本会が27回目となる。個人種目とは別に団体表彰があり、出場選手5名のうち、上位3名の個人順位の総和が低い順から団体の順位を決定する。今回はイタリアのローマでの開催となる。5月9日に20km、5月10日に50kmのレースが行われた。日本からは20kmの選手のみが派遣された。

2. 選手団

派遣団体は、選手14名に加え、スタッフ6名(コーチ3名、トレーナー1名、渉外担当1名、医師1名)で構成された(図1)。

3. 渡航前準備

3月20日に全日本競歩能美大会が行われ、4月11日に代表が選出された。トレーナーより渡航前のコンディションチェックが事前に行われた。書類上、現在の傷害や使用薬品について問題となる選手

はいなかった。TUE申請希望者もいなかった。しかしながら、1名の選出選手が足の故障のため、直前になって参加を辞退した。

4. 渡航および現地の状況

ローマへは直行便(アリタリア航空)で、片道約12時間を要した。到着は日本時間の24時で、疲労を訴える選手も少なくなかった。滞在先は、フィウミチーノ空港からバスで40分ほどのホテル(Sheraton Parco de' Medici Rome Hotel)であった(図2)。同ホテルはゴルフ場併設のリゾートホテルで、ゴルフ利用客も一緒に滞在していたが、各国の利用も同じホテルであり、大会直前には利用客はほぼ競歩選手で占められることとなった。

水道水は飲用可であったが、衛生面を考慮し近くのスーパーマーケットまでミネラルウォーターの買い出しを行い、適時選手へ提供した。大会前にはオフィシャルからもミネラルウォーターの提供があった。

食事は3食ビュッフェ形式で提供されるものの、メニューはほぼ毎回固定しており、2種類の Pasta



図1 全体写真



図2 滞在先ホテル

(マカロニ)、メイン(肉か魚、朝はハム、卵)、副食(生野菜、果物)などで構成されていた。味や新鮮さについては概ね問題はなかった。大会直前には選手各自が携帯していた米やうどんなどを調理し、主食とした。

トレーニング場所は当初、ゴルフ場外のカート通路を使用していたが、ゴルフプレーヤーからのクレームもあってか急遽場所が変更となり、主催者指定の駐車場スペース(片道500m強)があてがわれた。

5月のイタリアは気候がよく、日中は晴れていれば24度(黒球温度は32度を記録)まで上昇するものの、夜間は10度前後まで低下するため、寒暖差は大きい方であった。湿度も低く、結果として大会前後には上気道炎が流行することとなった。

5. 現地での医療活動

ホテル内ではトレーナー室にマッサージベッドを置き、必要時ケアが行われたが、初回時はなるべく面談形式で医師とコンタクトを取るようし、現在の問題点について確認を行った。

大会2日前の午前中に、シニア男子4名がABP(Athlete Biological Passport)対象となり、同ホテルの別館に用意されたドーピング検査室で採血を行った。同伴については特に制限はされなかった。様式・用紙など幾つか日本のものとは異なっていたが、特に問題なく検査を終了した。

大会当日は競技場外のテントにブーススペースが割り当てられ、資材(ベッド、氷、荷物など)の置き場とした。大型モニターが設置されていたが、テントからは見えない角度に位置しており、テント内には実際競技が始まってどうなっているのか確認できなかった。

参加選手1名が大会前より腹痛を訴えており、半ば強引に参加したものの、もともとの故障箇所であるハムストリングスの痛みもあって途中でリタイアした。この選手がドーピング対象となっていたようだが、特に改まった通告もなく、現地スタッフに現地医療スタッフのいる場所を誘導されるようなかたちでドーピングコントロールステーションへ到着した(図3)。この時点ではじめてドーピング対象であることが確認された。待機中に悪寒のために震えていたところ、けいれんと勘違いされて現地のメディカルサポートに通告され、救急処置がなされる結果となったが、結果としては状況説明のみで解決した。脱水や胃腸炎症状のため排尿は困難であったが、部分検体も行ってなんとか必要量を確保するこ

とができた。日本チームからのドーピング対象者はこの選手1名のみであり、検査終了時には20時をまわっていた。

この選手とは別にシニア男性の1名が大会前より上気道炎症状を訴えていた。無事完走を果たしたものの、その後同様の症状を呈したものが何名かおり、感染が広がったものと考えられた。

成績としては、U20男子の二人が自己ベストを更新してそれぞれ8位、9位と善戦した(団体3位)ものの、U20女子、シニア男子、シニア女子の最高位はそれぞれ10位、12位、25位と事前の期待に叶わない結果となった。

6. まとめと反省

渡航に関しては概ね問題なく、当初みな体調は良好のようであった。日夜の寒暖が強く、それなりに環境ストレスがあったものと考えられる一方で、オリンピック代表選考レースが続き(神戸、能美)、本来であればオリンピックにむけた練習の時期に大会が企画されており、コンディションの調整もかなり難しかったものと考えられた。時間の経過とともに体調の不具合を訴える選手が出てきて、対応としては後手にならざるを得なかった。上気道炎などは積極的な予防策を講じていく必要があると考えられたため、早いうちから選手へのアプローチを行っていく必要があると感じられた。



図3 ドーピングプロセスを実施するキャンピングカー